文化遺産研究部の調査研究概要

年度計画にもとづく調査研究も、4・5月の準備期間を経て、6月以降いよいよ本格的に稼動し始めました。とくに7月に入ってからは、町並み調査や文書調査、遺跡整備の調査など、現地に出かけての調査が多くなっています。

建造物研究室では、醍醐寺、唐招提寺、東大寺、元興寺など古代建築の調査をはじめ、高山市の町並み調査や文化財建造物の保存修復に関する研究など、活動の場面は多岐にわたります。またこれに併せて、文化庁が行う平城宮跡第一次大極殿院復元の事業に、専門的・技術的な立場から援助するという大きな仕事があります。ただし、本年度からは独立行政法人化に伴って、事業主体である文化庁などの要請に応じて助言し援助するという立場に変わっていますので、昨年までとはいささか異なる戸惑いもあります。

北海道常呂遺跡の整備状況

歴史研究室では、7月中旬に東大史料編纂所と合同で薬師寺の文書調査をおこない、7月下旬には石山寺の依頼による文書調査に参加しました。石山寺では、最近その所蔵が再確認された「薫聖教（においのしょうぎょう）」13巻に関する記者発表が26日におこなわれ、その準備に協力しました。また8月には、東大寺の聖教文書類の調査をおこない、文化庁の醍醐寺の聖教調査に参加しました。その他、興福寺文書や北浦定政「松の落ち葉」の調査や写真撮影なども継続して実施しています。

遺跡研究室では、全国各地で整備されている史跡・遺跡の中から、より大規模なものを120箇所程度選び、その整備・活用・管理の状況を調査研究する計画を持っています。初年度に当たる今年は、まず対象とする遺跡の選び出しと調査項目などの整理をおこない、現地調査は北海道と東北地方を計画しています。来年度以降、順次地域を広げていく予定です。また、古代庭園に関する調査研究も重要な課題です。今年度は、日本庭園の源流ともいえる古墳時代以前の「流れ」に関する遺跡や遺構を対象にした研究会の開催を計画しています。これらに併せて、発掘調査で確認された「庭園」遺跡のデータ・ベースを作成し、奈文研のHPで公開していく予定です。

（文化遺産研究部）